

厚岸水鳥観察館だより

べかんべうし

別寒辺牛

●問い合わせ／水鳥観察館 ☎52-5988



見渡す限りのヒシ

ペカンベウシ川の名前の由来は？

ベカンベウシという地名は、アイヌ語でペカンベ(ペカンペ)＝水草のヒシの実、ウシ＝多いところ、合わせて『ヒシの实の多いところ』を意味します。ヒシはでんぷん質の多い実を付けるため、当時道東のアイヌの人たちの重要な食料となっていました。しかし近代になって、ペカンベウシ川にヒシがあるという話も記載ありません。また厚岸のアイヌの人たちが、塘路湖にヒシの実の利権を奪いに行ったという言い伝えさえあります。これはどういうことなのでしょう。



ヒシの実

現在、ペカンベウシ川支流のチライカリベツ川はヒシで覆いつくされています。近年でヒシを発見したのは2011年ごろで、水鳥などの野鳥由来で種がやって来たのか、カヌーなどの意図的でない運搬なのかは不明ですが、確実にヒシが大繁茂しています。その代わりに元々生息していた水草であるネムロコウホネやヒツジグサは、壊滅的な状態になっています。ただしこの状態も永遠に続くわけではありません。なぜかという、道東海岸

線の地面はプレート運動による大きな上下動と、プレートの短周期的な運動(約200～400年)による数回の上下動が繰り返されているからで、いずれ水位が上がり海水が流入し、ヒシのような淡水系水草は数百年後にその役目を一時的に終えます。

さて、1400年ごろには今とほぼ同じ海岸線になっていて、1600年ごろには再び海になっていますので、アイヌの人たちはペカンベウシ川の河口域が陸地化、淡水化していき、そして再び海に戻る現象を経験をしています。淡水化してはじめて確認できる水草は、以前私たちが見ていたネムロコウホネやヒツジグサであろうと推測できます。その後どこかの段階でヒシが進入し、水草はヒシに置き換わる、つまり『ペカンベウシ川』なのです。そしてまた地面が上昇し現在に至っていると考えれば、1600年頃を境目にしてそれ以前の名前が残っていても何ら不思議ではありません。

そして現在、再び『ペカンベウシ川』に戻っているわけです。海岸線は常に動いていて、それによって生き物の生息分布が変わることを考えながら、過去や未来の環境を予測するのは楽しいですね。

オオハクチョウ飛来日当てクイズ

厚岸湖～別寒辺牛湿原に、オオハクチョウが初飛来するのは、今年の何月何日でしょうか？

●応募方法／水鳥観察館、情報館、コンキリエなどに設置してある応募用紙で応募するか、ハガキ、ファクス、メール、水鳥観察館ホームページから予想初飛来日(○月○日)、郵便番号、住所、氏名(ふりがな)、性別、電話番号、職業(学校名・学年)を明記して応募してください。応募は1人1回です

●応募先／〒088-1140 厚岸町サンヌシ66番地 厚岸水鳥観察館『オオハクチョウ飛来日当てクイズ』係
●賞／ドンピシャ賞3人＝厚岸町の自然の恵み『殻付きカキ(カキえもん)』セット

※正解者多数の場合は抽選。正解者が2人以下だった場合はニアピン賞として、最も近い日を選んだ人の中からドンピシャ賞と合わせて3人になるまで抽選(賞品はドンピシャ賞と同じ)

●締め切り／9月30日(土)(当日消印有効)

●発表／初飛来後、抽選を行い当選者に通知

●飛来の確認方法など／初飛来日は、水鳥観察館職員が観察館野外観察カメラで確認した日とします。10月1日より前に飛来した場合、賞は応募者全員の中から抽選します



【過去10年の初飛来日】

平成19年10月12日	平成24年10月9日
平成20年10月12日	平成25年10月6日
平成21年10月8日	平成26年10月11日
平成22年10月13日	平成27年10月7日
平成23年10月4日	平成28年9月29日